

学校教育における国際テレビ会議の現状と課題 International Video Conferencing in Current School Education

テレクラス・インターナショナル・ジャパン
代表 高木 洋子

初めに

昨今、学校教育における国際交流や異文化理解教育、また地域社会の国際化が言われている。メールやホームページを使って文字や写真による情報交換もいいが、人と人が理解し合う一番手っ取り早い方法は、会ってテーブルを囲んで話すことである。目と目が合い肉声を聞き、表情が気持ちを伝える。着物・持ち物・態度が個々の固有文化を無言で伝える。

1992年夏、私は初めて国際シンポジウムに参加した。Christa McAuliffe Institute -National Foundation for the Improvement of Education はパルアルトのスタンフォード大学で開催され、多国からの参加者と共にするワークショップや食事・宿泊は、言葉の不自由さを引いても十分な国際理解の場となった。その後のI * E A R N (International Education and Resources Network) 国際会議・ONLINE EDUCABERLINE 会議など数百人の教育者との交流体験は、特に国際間理解にとって、「会って話すが一番」との確信を深くするものであった。

この国際交流を学校教育で実践する時、相互に相手校を訪問することが一般的である。しかし、訪問のためにこの地球上を移動するには、航空費・滞在費とコスト高で経済的に参加できる生徒は制限され、また度々、行き来することは不可能である。

一方、高度情報通信社会が発展し、高速化した通信線は数千キロを瞬時に結び、音声を交信させ、双方の映像をモニターやスクリーン上に映し出した。国際テレビ会議である。向かい合うとテーブルを囲んでの会話と同じ環境が生まれた。残念なことに触覚・味覚・嗅覚の出番がないが、視角・聴覚で捉えた範囲でそれらを想像し、かなり満足させることはできる。

高額な経費がかかる現地訪問に代わって、国際交流に有効なこのテレビ会議は、通信回線・テレビ会議機器・通信回線使用料・英語力・相手の5点が揃えばいつでもどこでも国際交流の場を作る便利な手段である。最近、大手企業では海外の出張旅費を節約するために、このテレビ会議が頻繁に使われるようになった。しかし、学校教育現場では、国際テレビ会議の実践例は周知されず、有効性は認識されておらず、カリキュラムには探してもない。たまに報道されるのも珍しいからであって、イベント扱いである。なぜか、戦後の教育に机・椅子・黒板・教科書・教師がなくては、学校教育が実現しなかったように、現在の学校教育現場に国際テレビ会議を実現させる上記5点がないからである。

しかし、避けられない情報化社会・情報教育・世界的な教育ネットワーク事情を思

う時、教育に国際テレビ会議を使わない手はなく、国際交流は勿論、国際間共同プロジェクト学習にも積極的に取り込むことである。極言すれば、この国際テレビ会議を学校教育に日常的に取り込むことで、教育のスタイルは根本的に変わり、この子供達が将来見せる日本の顔は、従来の日本人の定評をすっかり覆すことになる。

最近、テレクラス国際テレビ会議は年間約20回である。45カ国を同時に接続する多地点接続会議実施6回を含めて、今までに57回のISDN国際回線を利用した国際テレビ会議を開催した。またアナログ回線を利用したテレビ電話による国際交流は478回を数える。海外対応国は22カ国に及ぶ。これらの10数年の実践記録は、同時に通信回線・通信機器などのテクニカルな面と、企画・内容のノウハウと、海外遠隔地教育関係者の人脈を意味する。

ここではテレクラス実践を基に、学校教育における国際テレビ会議の現状と課題について、以下の点を述べたい。

- 1 通信回線環境・テレビ会議端末機器・コスト
- 2 学校環境と地域社会
- 3 実用英語力・プログラム内容・トピック
- 4 海外事情
- 5 なぜ国際テレビ会議？
- 6 望ましい国際テレビ会議

1 通信回線環境・テレビ会議端末機器・コスト

(1) 学校の通信回線環境

情報教育に多くを期待する学校は、Net Dayに見られるように行政を待たずにPTAや地元ボランティアと手を組んでISDN回線を引き学校内LANを構築する。最近、兵庫県姫路市を中心とした3小学校では、スクールズオンラインプロジェクトに応募し、PTAと協力してISDN回線512Kbit/sを引き込み校内LANが張り巡らされた。CU-SeeMeなど初めて耳にする先生が、この3校とハワイの中学校をリンクしてインターネットによるテレビ会議を実施した。

一方、出遅れた学校は未だにアナログ回線一本で、テレクラステレビ電話通信でさえ、唯一の外線であるファックスをi時止めて実施ということになる。

しかし最近ではISDN回線INS64が引かれた学校も多くなり、テレビ会議実施に当たってはKDDやNTTなど公衆テレビ会議室まで出かけることなく自校で開催するケースが増えた。自校開催希望で、INS64が未だ引かれていない学校の場合は、テレクラスの出費で地元のNTT営業所へ臨時回線架設工事を依頼する。高画質のT1ラインやサテライト使用に比べて、テレクラステレビ会議で使用するISDN128K(2B)は、その質に歴然とした差がみられるが、一回でも多くの機会を生徒に提供することを基本姿勢にしているテレクラ

ス事務局は、助成金による予算を考える時、一回（2時間）回線使用料が56万円の128kが妥当な線であるとしている。

昨年末に行われた平塚ろう学校とハワイろう学校の高校生によるテレビ会議では、双方ともに感動の体験ではあったが、言葉の違い・手話の違いに加えて、口を読む大事な要素があり、このような場合にこそ、高速の384Kや512Kで提供すべきであった。

回線接続の安定性を言えば、ISDN回線は通常の電話回線と同じく、一度つながれば安心と思われている。しかし、そうではない。特にアジア各地域は不安定で、回線を保持する技術者も少ない。ソウルとの会議で10分おきに回線が切れ、同時に会議の流れも乱れ、主催者側として冷や汗をかく場合もあった。一般的にダウンした場合、どうするばよいか。落ち着いてつなぎ直せば良い。

多地点同時接続の場合、音声が発声されたサイトに自動的に映像を取りに行くテレビ会議機器が多い。しかし音声から画像切り替えまでに数秒かかり、この数秒がパネラーに不安感を与える。またモニターには、子画面上の自サイトを除いて常時1サイトの映像があるが、司会やディレクターには全サイトが見れる工夫がいる。

国際テレビ会議は日本側の回線だけが問題となるのではない。相手国・相手校の通信環境が同じく重要である。地元の通信電話会社またはKDD海外事務所のテレビ会議室を借りるケースが多い。地元の通信電話会社では、当然、会議室・機器使用料が必要で、北京のBTA電子会議室使用料は、通信料に匹敵する高額の使用料である。メルボルンテルストラも、地元の高校が利用すると言えども減額したりはしない。テレクラスは、これらの出費も予算化する必要がある。

キーワード：学校にISDN通信回線を引く

（2）テレビ会議端末機器

こねっとプランで選ばれ、NTTからPC使用のフェニックスが設置された学校以外で、テレビ会議端末機器が入っている学校は、一部の私立校を除いて皆無である。そのため3年前に財団法人マルチメディア振興センター助成金で購入したテレクラス事務局所有の唯一の京セラKV6200テレビ会議端末機が、車に乗り、新幹線に乗り、果てはジェット機にも乗って、日本中の学校に運ばれ使われている。

モニターや音響など視聴覚周辺機器は、学校のLL教室に備わっている機器を使用している。最近、映像分配器とTVモニター一台の寄贈があり、通常、子画面に出している自サイトを、別途モニターに出すことができるようになった。

年間テレクラステレビ会議数が20件前後の場合は、上記のように機器を移動させれば良いが、いずれ間に合わなくなる。そこで、地元公共機関や大学で、もしくは、地元のある学校に一台のテレビ会議端末機を購入し共有する。学校だけでなく

行政も地元自治会も市民コーラスグループも、国際交流センターイベントも、母親学級も、このテレビ会議機器を共有する。インターネット接続PCや周辺機器を揃え、地域のメディアセンターにするというのはどうだろう。

キーワード： テレビ会議機器つき地域メディアセンターを作る

(3) コスト

ISDN国際回線は割引がなく、128K(2B)2時間のセッションで約5万6万円の通信回線料の請求がある。その上に事前のテスト費用も安価ではない。また多地点同時接続時に使われるMCUの使用料は通信費以外に必要であり、5地点で約8万円である。しかしISDN回線を利用したテレビ会議が高くつくからと言って、インターネットを使ったテレビ会議はどうかというと、128kの現状では、会議やコミュニケーションができる質のものではない。

キーワード： 学校教育通信回線使用料に関する E-Rate の早急な実現をはかる

2 学校環境と地域社会

(1) 先生の対応 1： テレビ会議は周知されていない。

学校現場は、インターネット環境が順次構築されるなかで、実践的な英語学習や海外の学校との共同学習など、近年導入される総合学習授業も視野にいれた先生の意識が、従来の教育概念から変わることを期待されている。しかし大半の先生には、新しく導入された通信環境の生かし方が分からない。やがて直面する総合学習の使い方が分からない。海外にパートナーを見つけられないという戸惑いがある。

決定的なことは、環境ができてはいるが、それをカリキュラムに仕込む通信回線料が予算化されていないという事実である。

国際テレビ会議に関しては、教育への計り知れない効果があるにも拘わらず、周知されていないために、その有効性への認識も乏しい。実践からリアルタイム公開、そして広報活動が必要である。

キーワード： 教員研修などに率先してテレビ会議を使い、実際に先生が体験して、その多様な使い方をイメージする

(2) 先生の対応 2： 一人でして失敗したら困る

これからの先生は、従来の知識を教える人から、生徒の知識欲を刺激し、問題意識を持たせ、調べ学習へ誘い、高度な内容へと導くガイド役が求められる。このガイド役は、生徒のテレビ会議準備期間に最も必要とされる。

ところがテレビ会議中に先生自身の英語力が問われることを恐れて腰の引ける先生が多い。AETと一般に呼ばれる英語を母国語とする教員と組んで、自身の英語バリアを減らし不安を消す。

この会議を英語教科のみの機会と捉えず、社会・歴史・生物・科学・数学・音楽・絵画芸術・情報教科と組み、他教科の先生と共同で企画することで、多様性のある豊かな内容を盛ることができる。このプロセスは、クロスカリキュラムの事例として、一つの事象を多面的・総合的に捉える将来のカリキュラム作りに多くの提案をすることになる。

キーワード：先生のコラボレーションは学内から。皆で取り組みば恐くない。

(3) 地域社会との連携...地域に開かれた学校

子供・生徒を人間にするのは、学校教育の場だけではない。家庭と地域社会も実践的な教育をする場である。具体的には、地域社会の情報化・国際化へ向けて、Net Dayをきっかけとした先生・PTA・地元の連携体制を作る。また各地にある市民の国際交流センターと連携し、学校での国際テレビ会議をセンター活動の一つとして資金援助を図る。

地域の国際化という視点で見ると、多くの姉妹都市が誕生し、流行のように市長や市の関係者が相手の都市を訪問・契約のサインを交わすが、その後の交流に成長・継続性が見られない。これらの姉妹都市が強力な通信回線で結ばれ、学校教育における共同学習プロジェクト・教師・PTAの交流・市民同志の楽しみ/対話が日常茶飯事に行われるとどうなるであろうか。

キーワード：地元で眠っているマンパワーもお金も使う

3 実用英語力・プログラム内容・トピック/発表

(1) 使えない学校英語

テレビ会議中に自己紹介でさえ事前にしたメモを読む生徒が多い。長年の英語教育が時代の要求に合わなくなったと同時に、教え方の体質が変わらないため、教える先生も教えられる生徒も面白くない。まず、英語を学習する明確な目標が双方にない。取りあえずは高校入試・大学受験用である。従って受験勉強以外には、折角学習した英語を使い試みる時間と設定が学校教育にない。受験用には、正解をひとつ探せばいいが、実際には相手や質問次第で、反応は多様であり、必要なのは、その多様な反応に英語でどう対応するかの訓練である。

教科書にある文面をノートの左ページに写し取り、右ページにその日本語訳を書かせてノートを提出するケースをよく見る。これは生徒の時間を無為に奪い、英語嫌いを作るだけである。将来の翻訳家希望者が試みればよい。英語学習で必要なことは、英語独特の美しい発音やイントネーションを楽しみ慣れる、文面から書き手のメッセージを素早く掴み取る、耳に入る英語の内容把握と同時にこちらの対応を準備する、相手に正確に伝える工夫、英文やフレーズのルールを覚えて読み易く書き易くする、プレゼンテーション・討論・会話の場を多く設

定して、学習の成果を発表し使うことに慣れる、魅力的な話し方を目指すことである。これらは頭での学習よりも、場数を踏み訓練で慣れた方が効果的である。

学校の各教科学習で知識を得ても、実際の体験の場が少ない学校教育の中で、このテレクラスは、シミュレーションではない現実の体験をするという点で貴重な体験学習である。参加生徒は自分一人で判断し、各個人の英語力で各国の相手に対応するのである。今後、ますます学校でインターネット環境が整い、国際間のメールのやりとりや、100校プロジェクトのひとつ「インターナショナル クラスルーム」のような複数のクラスが参画する共同プロジェクトが一般化して、英語による速読や書く表現能力がつけば、次に待たれるのは、必然的に実践的なプレゼンテーションやディスカッション能力となる。

小学校からの一貫したコミュニケーション能力・表現力を重視した英語語学教育が、国際間共同学習・共同作業・国際テレビ会議に参加する可能性を作ると言える。

メールの書き方も早い時期に身に付けたい。自己紹介やプレゼンテーションアウトラインをメールで交換しておけば、相手への興味が深まり、アウトラインを参考にした質問の準備もできる。 テレビ会議を活発化する手段である。

キーワード：今、必要な英語力を。メールの活用を。

(2) プログラム内容

相手校はテレビ会議参加型が多いため、必然的に当日のプログラムは日本側が作成し、相手校の同意を得るといったパターンが多い。ところが自校参加生の全てに発表の機会をと熱心なあまり、相手校は聞くだけ、見るだけというプログラムが提出されたケースがあった。後述する国際共同学習に必要な先生同士のコラボレーションが欠落し、相手校生徒への教育者としての視線が見られない。自校さえ良ければという競争社会の反映か、またはグローバルな教育の視点が先生の中に育っていないのか、残念である。

プログラム内容が決まると、次に必要となるのはタイムテーブルである。殆どの国際テレビ会議では時差があるので、表示は、00:00から始めると双方共に分かり易い。海外からはグリニッチ時間を使うという提案もあるが使い慣れないと却って混乱するので、00:00表示を勧めている。

[実例：Time Table] (98年12月テレクラス テレビ会議#50神戸 ハワイより)

00:00 Opening Greetings by keypals

00:05 Topic 1: School Events :Culture Day
Presentations-Q&A

00:20 Topic 2: Teen Laws
Presentations-Q&A

00:35 Topic 3 Teen Pregnancy and Abortion

Presentations -Q&A

00:50 Topic 4: Cloning

Presentations - Q&A

01:05 Topic 5: New Traditions

Presentations - Q&A

01:20 Free talk

01:30 Closing of Teleclass Conference

~~~~~

多地点同時接続テレビ会議の場合は、その他にプログラムシナリオが必要となる。他のサイトへの質問の順番なども決めたシナリオを事前に作成し、各サイトの機器オペレーターが、同じシナリオに沿ってミュートなどの操作をすると混乱が少ない。

プログラム進行を務める司会は、高校生になると双方ともに生徒に任せる。特に帰国子女に任せると上手く進行する場合が多い。またカメラワークなど機器操作も生徒に任せると良い。生徒は嬉々として担当してくれる。

テレクラスからは、次のような「テレビ会議用バリエーション」を作ってプログラム参考事例としている。

#### 【テレビ会議バリエーション】

- \* 料理・折り紙・習字（海外相手校にも最低必要な材料を先に送っておく）
- \* 音楽授業： 楽器演奏共演・コーラス・ジャズチャント
- \* コマーシャル作りと発表（実際にどの製品が買いたくなった?）
- \* 店頭販売実践 ドル・円・ペセタ・フラン・元・ウオンなど
- \* 絵画・心理学的描写（3分で与えられた言葉に反応して描き、説明）
- \* お話・おはなし（即興やメールで相互に作ったお話の発表）
- \* ドラマ上演（シナリオはメールで作る。相手と役を決めて上演）
- \* ミュージカル合同発表
- \* 詩の朗読
- \* 講演（学校外の招待者の話を聞き・わざを習う）
- \* インタビュー  
（学校外の招待者へインタビュー・相手校からのインタビューも試みる）
- \* ダンス指導（衣装等の工夫）
- \* 囲碁勝負
- \* プレゼンテーション（チャート・グラフ・ビデオ使用）と質問・コメント
- \* 討論・デベート・スピーチコンテスト

テレクラスであたためているプログラムの一つに「ドラマ」がある。目下、千里国際学院とマケドニアの高校生が、メール交換でそのシナリオ作りの段階である。シナリオが完成するとそれぞれが登場人物になって練習し、テレビ会議のスクリーンを舞台に見立てて上演する。そこでは背景・音楽・小物・衣装など総合的に、日本とマケドニアの生徒と一緒に考え、仕事をするということである。

キーワード：メールとテレビ会議機器があれば、なんでもOK。あとは眠っている創造力を刺激するだけ。

### (3) トピック/発表

自由にフリートークをさせたいという先生が多い。しかし実際に自由な会話になると、これが予想に反して会話にならない。「 をしている?」「Yes, yes」「 が好き?」と言った質問がスポーツ界芸能界を一渡りすると、後が続かないのである。会話内容も浅く好き嫌いに終始して、おしゃべりの域をでない。

テレクラスの場合、各年の基本テーマを決め、関連したトピックを生徒が選ぶ。選んだトピックについて双方が準備期間に調査し発表練習を重ねる。相手が理解し易いように、チャートや実物が用意され、見せる工夫が凝らされる。ハワイ州ワイパフ高校のキャロル先生は、神戸の葺合高校とのテレビ会議が多いが、彼女は、事前にビデオで練習発表を録画しクラスでそれを見ながら、声の出し方・顔の位置・表情などコメントを出し合い、プレゼンターの研究をさせている。キャロルは、この事前練習だけでもテレビ会議の価値が充分にあるのですと告げる。一方、日本側の先生は「どうも準備時間が取れなくて...ぶっつけ本番です」と言われることが多いが、相手校を見つけ、場所を作り、助成を獲得して、やっとテレビ会議実現まで進めたテレクラスとしては、充分に使われないもどかしさが残る。

多地点同時接続テレビ会議の場合は、各サイトに等分の時間を割り当て、その持ち時間のホストとする。持ち時間内は各ホストに自由に進行を任ず形がいい。ホストは興味あるトピックを決め、事前アンケートなどを実施して当日の持ち時間が、興味深い討論へ展開するように準備をする。

そのいい例が3月に3回のシリーズで行われたアジアフォーラムである。これは北京大学・香港大学・又石大学(韓国)・東京大学・帝塚山学院大学(大阪)のアジア5大学が各大学3-9名の大学生を選び、最寄りのKDDや現地電話会社のテレビ会議室へ赴いて、延べ8時間に及ぶテレビ会議を行った。ホスト校として各大学は40分から1時間を自由にプログラムすることができ、討議したいトピックを予め選んで、他校へ選択理由・討議内容・アンケートなどと共に送り、全参加大学に事前準備を促した。各ホストが選んだトピックは：

北京大学「環境と暮らし：アジア環境・地球環境を守る」

香港大学「情報ネットワーク：グローバル化・スピード化への対応」

又石大学「異文化理解の練習問題」

東京大学「漢字文化について」

帝塚山学院大学「国際理解・国際交流：互いにアジアの良き隣人であるために」  
各大学毎に興味深い問題提起があり、展開の妙があり、互いに納得があり、次回へ持ち越しがありで、国際テレビ電話がアジアの若者をこのように結び合う事を主催者として目の当たりにすると、やはり4回目5回目を用意したくなるものである。

しかし、これは初めての試みではない。1997年春、テレクラス初めての国内5サイトを結ぶ6回シリーズのテレビ会議「高校生が結ぶ地域社会：国内編」を企画した。北海道から沖縄まで5高校が一回毎にホスト役を務め、各地の社会問題や関心事を討議材料にした。生徒各個人にメールアドレスがふられ、独立した生徒間と教師間のメーリングリストが活躍し、その上に6回のテレビ会議が乗るという画期的な催しであった。トピックも高校生の目線で選ばれた、「いじめと不登校」「携帯・PHS・ポケベル」「ボランティア」「制服・アルバイト」「万博誘致と海上の森」であった。

以来、テレクラスがプログラム作りやトピック選択に介入することは控え、生徒が持ち時間を自由にアレンジして、相手校のことを考えながら、ホスト校としてのプログラム作成を勧めている。

さて、過去2年間のテレクラス基本テーマは「地域社会を結ぶテレクラス」であった。今年は、「世界を感じる瞬間(とき)」"Touch The World, Touch The Future"である。身近な話題から世界の出来事にも関心を広げ、理解することから、互いに関わり合い、問題意識を持って欲しいというテレクラスの願いが込められている。内容は新聞やインターネットで、今、ホットな世界的话题を取り出し、トピックを決め、生徒間・先生間での電子メール交換で情報・研究を共有し、テレビ会議に向かって双方が、発表・質問の準備をする。また、どんな関わり方ができるかディスカッションで決定し、テレビ会議検討事項に具体的な行動が伴うように薦めているが、そこまで成熟していない。

キーワード：ホスト校で仕切る自信。「男は黙ってビール」はテレビ会議では通用しない。

#### 4 海外の相手校問題

##### (1) どう探す相手校

相手校がなければテレビ会議はできない。当たり前の話であるが、相手校が海外となるといつも簡単に見つかるとは限らない。しかも相手校にもテレビ会議が

できる環境やそこへ足を運ぶ意志がないと選択は狭まり、決定は困難となる。更に時差・カリキュラム・学校事務所の対応・校長先生の対応・他の先生の同意・休日・長期休暇・スクールバス問題・両親の許可・言葉などなどなど、日本側と相手校の間には解決の必要なバリアが多く、決定までは遠い道のりである。途中でどちらかの先生が、「もう沢山。またいつか」とならないとは言えない。

テレクラスの場合、57回の国際テレビ会議は、それまでのテレビ電話交流でできた海外の人脈が大きな要素となっている。またKDD海外事務所所在地の教育委員会から学校を紹介してもらう手も使った。国際会議へ出席しても海外へでかけても、現地の先生や学校とどのように良い関係を結ぶかが一番の仕事であった。飛行機の隣に座った人が教育者であれば、格好のチャンスにもなった。

中でもI\*EARN国際会議は世界中からK12の先生が300人400人集まり、一週間を研修で共に過ごす機会である。ブダベスト・バルセローナ・チャタヌーガと3年間参加してきたが、この会議はまるで地球学校の職員室の観がある。また求める相手校に出会える宝庫でもある。既に学校にテレビ会議機器が設置しており、教員研修などに使われているという発見もあり、帰国後「旭川・ビクトリア テレクラス デイ」として旭川市とビクトリア(AU)各地の小学校・中学校・高等学校同士が結ばれた例もある。この春も5月開催に向けて準備中である。

このように大切に増やしてきたテレクラス人脈であるが、目下、この100名余りの先生に、日本でのテレクラスメーリングリストである170名を加えて"TELECLASS THE WORLD"メーリングリストを立ち上げるところである。このML上で互いに呼びかければ、相手校探しはもっと容易になると期待している。

また、姉妹校提携先・研修訪問先・修学旅行先は、既に互いの様子が分っているので、なにかとやり易い先である。現在は、姉妹都市契約同士に多くのリンクの可能性があり、海外にネットワークを持つ日本人学校・公文教室なども、テレビ会議の相手校として、視野に入れることができる。

一方、世界的に発展している教育ネットワークは、日本の参加を待っている。このような海外ネットの情報は国内の学校現場には届かず、双方をつなぐ多くの橋はまだかけられていない。国際プロジェクト・コーディネーターが必要である。相手校探しだけでなく、常に海外の新しいプロジェクトやコンテストなどネットワーク情報を提供し、必要であれば日本語に変えて地域の学校に紹介する。また相手校との交流や共同学習など進めて行く上で発生せるトラブルを解決するといった国際プロジェクト・コーディネーター専門職の先生を地域に一人育てる必要がある。

キーワード：国際プロジェクト・コーディネーター専門職を作る

## (2) 先生のコラボレーション

相手校が決定すると先生同士は打ち合せに入る。テレクラスの場合は、日本側・相手側の先生・テレビ会議会場関係者・テレクラススタッフなど関係する全ての人のメールアドレスをひとつのグループにまとめ、以後の打ち合せはメールによるものとする。ここでプログラムやタイムテーブルが練られ生徒達の意見も反映される。前記の時差を初めとする多くのバリアを超えるためには、自校内の他の先生との合意と、同時に相手校の先生との綿密な打ち合せが必要である。

ここで、姉妹校関係で知り合った先生であれ、修学旅行で訪問した学校の先生であれ、どこかの国際会議で知り合った者同士であれ、面識のある先生同士は打ち合せも早い。互いに相手に迷惑をかけたり失望させたりしないよう自然に無責任なメールは控え、テレビ会議全体に責任を持つとするので、コラボレーションは和やかに速やかに進むからである。全く初めての組み合わせの場合は、先生達のためのテレビ会議をまず用意した方が、その後のコラボレーションを進める上で得策と言える。相手の顔を知り肉声を知って、初めてその後、一緒に働く相手のイメージが掴めるのである。

キーワード：先生同士の打ち合せには国際テレビ会議とメールの活用を。

## 5 なぜ国際テレビ会議？

一回の国際テレビ会議を開催するにあたって、コーディネーターも大変であるが、自校内の同意のとりつけ・相手校との打ち合せ・生徒の指導など担当の先生は通常の仕事の他に、新しく体験する多くの仕事を抱えることになる。或る意味では、国際テレビ会議は、むしろ先生にとってチャレンジなのである。やりたくないと思う先生があっても不思議ではない。しかし、参加した生徒達の通常の授業では見せない緊張の中にも生き生きとした笑顔を見る時、先生の苦勞は報われる。

しかし、第一回目はいつも物珍しいテレビ会議を次回につなげるためには、「なぜ英語を学習するか」と同様に、先生・生徒に明確な目的意識がなければ継続は難しい。なぜ国際テレビ会議をするのか？

教科書情報は古い。直に相手国の最新の情報を聞き、今の世界を実感する。又、国際交流は相互理解・異文化理解とよく定義されるが、テレクラスは、もう一歩足を進めて、「だからどうするのだ」と問う。新聞記事などで日々、報道される国際間紛争は、この物質的に豊かになった日本の日常生活からは想像し難く、「向こう三軒両隣り」の助け合い精神が日本にもあった筈であるのに、同じ地球上の隣人としての自覚に欠ける。

そこで国際テレビ会議を、一種の生徒による草の根外交と見る。行動的ネットへ展開する期待がある。互いに地球上のよき隣人であるために、どんな行動がとれるのだろうか。成人の中に見える「どうせ無駄」という諦めではなく、実践から何かが変わるという確信を子供達に持たせたい。それを各回のトピックにからめ

て話し合い、小さな実行可能な具体案を出し決定して、相手校と決めた日・決めた月に実行する。 次のテレビ会議で、互いにその成果を報告しあう。

その小さな行動とは、例えば道の空缶を拾う日。 小遣いの100円を集めて、避難民に医療品を送る日。 月に100円ずつ出し合って、ケニアの一人のフォスターチャイルドが学校へいけるように、クラスとして手続きをする日。 子供達はニュースの中から自分達にできる小さい行動を探し出す。 相手校のクラスメートと一緒に約束の行動であるから張り切ってしまう。 小さな地球市民の誕生である。

キーワード：国際テレビ会議は草の根外交・地球市民のデビューの場

## 6 理想的な国際テレビ会議

学校教育における国際テレビ会議と課題に関して、以上のように5つのポイントについて述べてきた。 最後に、では国際間で日常的にテレビ会議が実践されるための必要なキーワードはなにか。 文中のキーワードを抜き出してみた。

キーワード：学校にISDN通信回線を持つ

キーワード：テレビ会議機器つき地域メディアセンターを作る

キーワード：学校教育通信回線使用料に関するE-Rateの実現

キーワード：教員研修などに率先してテレビ会議を使い、実際に先生が体験する。

その多様な使い方をイメージする。

キーワード：先生のコラボレーションは学校内から。皆で取り組めば恐くない。

キーワード：地元に眠っているマンパワーもお金も使おう

キーワード：今、必要な英語力を。生徒のメールの活用

キーワード：メールとテレビ会議機器があれば、なんでもOK。

あとは眠っている創造力を刺激するだけ。

キーワード：ホスト校で仕切る自信を。

「男は黙って ビール」はテレビ会議では通用しない。

キーワード：国際プロジェクト・コーディネーター専門職を作ろう

キーワード：先生同士の打ち合せには国際テレビ会議とメールの活用を

キーワード：国際テレビ会議は草の根外交・地球市民のデビューの場

こうして並べると、国際テレビ会議そのものが、これからの学校教育のキーワードでないかと、今の生徒達に世界各地で活動する彼等の未来を重ねて、テレクラスの思いは飛躍する。